

博士(文学) 追 塩 千 尋

学位論文題名

中世の南都仏教

学位論文内容の要旨

〔目次〕

序論 本書の対象と視角	第二部 敦尊をめぐる諸問題
第一部 平安期南都仏教の諸相	第一章 初期敦尊の宗教的環境
第一章 道昌をめぐる諸問題	第二章 敦尊における密教の意義
第二章 子島寺真興の宗教的環境	第三章 敦尊における圖と教団規律
第三章 実範と関係寺院	第四章 敦尊の諸信仰と慈善救済事業
第四章 西大寺の変遷と敦尊	第五章 敦尊の東国下向
	第六章 忍性の宗教活動
	あとがき

鎌倉時代に南都、即ち、奈良の西大寺を拠点として、仏教史上に大きな足跡を残した僧侶に敦尊（1201～1290）がいる。敦尊は戒律と光明真言を広める一方、非人救済事業を行った僧として著名である。本論文はこの敦尊の伝記および宗教活動に関する歴史的研究である。この主題の分析は、敦尊の宗教活動それ自体の考察と、平安時代以来の南都僧の系譜の中に敦尊を位置づける考察との二つの方向から具体化されている。

「序論」は本論文の問題関心を簡潔に提示している。鎌倉時代はいわゆる新仏教の興隆する時代として、日本仏教史において最も注目を集めてきたが、いわゆる新仏教の創始者がいずれも比叡山（天台宗）の出身であるため、南都仏教や真言宗の系統は旧仏教に概括される傾向にあった。追塩氏は近年の研究動向も踏まえつつ、敦尊に代表される南都仏教の革新運動を高く評価し、それを真言宗の生み出した「新」仏教として捉えるべきことを提起する。それによって、鎌倉「新仏教」を従来とは異なる視角から理解し直すことが可能になるであろうと展望する。

「第一部」は平安時代から鎌倉時代に至る南都仏教の実態を明らかにし、敦尊の置かれた立場を歴史的に見極めようとした研究である。4章より構成されている。

「第一章」は9世紀の僧侶である道昌を取り上げ、その法系・宗教活動・人脈などを追跡して、平安初期の南都僧の一つの型を明示している。即ち、道昌が南都元興寺僧としての性格を生涯保ち続けながら、一方では空海に灌頂を受けた密教僧でもあったこと、また、道昌には南都に係わりの深い行基信仰との結合も見られることを指摘している。

「第二章」は10世紀の興福寺僧真興の研究である。追塩氏は真興について、まず第一に彼が醍醐寺流の密教を学んだ点に注目する。以後、南都密教僧は多く醍醐寺流で、敦尊に至るとする。第二に、真興が法相宗と真言宗との教義の矛盾点を解消し、両宗の和合が可能になる方向に道を開いたことに注目し、敦尊への影響を想定している。第三に、真興が遁世した子島寺について分析し、それが興福寺の「別所」の初期のものであり、密教の実践の場であったこと、以後、かかる「別所」の広がりの中で密教と諸信仰が活発化してゆくことを論じている。

「第三章」は11～12世紀の僧実範を取り上げ、その関係した多くの「別所」的寺院を詳しく検討し、戒律や密教とともに修驗的性格を検証している。実範は南都佛教における戒律復興運動の出発点に位置付けられるが、追塙氏は南都佛教の革新運動の胎動がこの実範に認められるとする。

「第四章」は、西大寺が南都七大寺の一つに数えられながら、平安時代を通して寺勢が衰え、興福寺の末寺に化した様相を辿り、叡尊は勧進聖的役割を担ってその復興を果たしたと説く。さらに叡尊によって復興された伽藍の構成から、西大寺には鎮護国家寺院の機能とともに密教寺院の性格が濃厚に認められるとする。鎮護国家の修法と密教の加持祈禱には相通じるものがあり、その兼行は真言僧としての叡尊の特性にかなっていたと論じている。

「第二部」は叡尊自身の伝記と宗教活動に関する研究であり、6章よりなる。

「第一章」は、叡尊が西大寺に入る（35歳）以前の伝記の研究である。叡尊をめぐる人脈と関係寺院の性格に検討を加え、叡尊の持つ諸信仰・教義の淵源を探索した結果、養母から醍醐寺系修驗との係わりが見出されること、醍醐寺における修行期に太子信仰・弁才天信仰との接触が窺われること、高野山に赴いて修驗者・勧進聖的性格を強めたと見られること、文殊信仰にも接したと考えられること、などを明らかにしている。

「第二章」は本論文の核心に位置する章である。従来、叡尊については、戒律僧としての側面が専ら強調されがちであった。追塙氏はこれに対して、戒律に注目するのみでは叡尊の全貌を捉えることはできないとし、叡尊がもともと真言僧であることに視点を据えなければならないと説く。密教の修行を続けていた叡尊に、34歳のとき転機が訪れた。それは密教僧が多く魔道に墮ちるのは何故か、それはいかにして克服しうるか、という問題であったが、その解答が戒律であった。ここに「真言律宗」の成立を見る。さらに氏は、叡尊には文殊信仰・太子信仰・行基信仰が存在したことを指摘し、この三信仰を媒介にして密教と戒律が結び付けられたと論じている。叡尊に訪れたもう一つの転機は、64歳のときの光明真言会の開催であった。これについて追塙氏は、この転機の原因は2年前の鎌倉訪問にあったと分析する。即ち、このとき叡尊は東国に勢力をもつ念佛信仰への対処に迫られ、授戒活動の限界を感じて、光明真言に新たな意義を見出すことになったと捉える。光明真言によって破戒・無戒の多くの庶民が組織されることになったが、非人はその対象に含まれないことも指摘されている。このように氏は、叡尊の密教僧的性格・活動はその生涯を通して一貫したと主張する。

「第三章」は、叡尊がたびたび圖を用いている問題を取り上げ、教団組織の維持・運営に圖が有効であったことを指摘している。圖と夢との比較にも論を進めている。

「第四章」は二つの問題を扱う。一つに、叡尊における文殊信仰・太子信仰・行基信仰の特徴を論じ、彼の弟子である忍性との出会いに転機があったと説く。それ以前はこれら諸信仰は主に戒律との結び付きにその意義を認められていたが、以後は慈善救済との関係が意識されるようになったとする。二つに、叡尊の行った慈善救済事業の性格を論じ、基本的に非人を対象とした衣食の施給に限られること、唯一の土木事業である宇治橋修理は綱代を禁止するための特殊な例であったことを明らかにしている。氏は非人救済は非人を光明真言会に結縁させないことに關係すると理解し、そこに叡尊の思想が差別の問題を内在させることを指摘するとともに、叡尊の教団の発展を阻害することになった種々の要因にも言及している。

「第五章」は叡尊の修驗的性格を検証し、かつ関東への旅行に係わる諸問題を論じている。

「第六章」は忍性の宗教活動の特徴、及び忍性と叡尊との関係について論じている。

以上のように、本論文は、鎌倉時代に登場した叡尊の宗教活動について、南都佛教の伝統との係わりを追究するとともに、その革新運動としての特徴を分析し、以て叡尊の興した真言律宗の歴史的位置を捉えようとしたものである。その結論として、叡尊を南都佛教および真言密教における「新佛教」運動の担い手とみなすことは可能であり、いわゆる「鎌倉新佛教」は南都佛教・真言密教も視野に収めて検討し直されねばならない、という見通しを提示している。

# 学位論文審査の要旨

主査 教授 河内祥輔  
副査 教授 今西順吉  
副査 教授 南部昇  
副査 助教授 細田典明

## 学位論文題名

### 中世の南都仏教

本論文の研究成果は大きく二つに分けることができる。一つは叡尊に関する研究であり、もう一つは中世南都仏教に関する研究である。

まず、叡尊に関する研究であるが、この課題は本論文の根幹をなすものであり、特に次の諸点をその成果として認めることができよう。

第一は、叡尊は密教の修行を終始一貫して変わらずに続けていたことが検証され、密教こそ彼の宗教活動の根底であったことが明らかにされた点である。従来、叡尊に関して専ら重視されてきた戒律については、追塙氏は戒律は僧侶の当然に守るべきものであり、戒律だけを独立させても意味をもちえないことを指摘し、戒律は密教による救いを確かなものにするものとしてその意義が自覚されたという理解を提示して、密教と戒律の関係を明確化している。この氏の見解は、叡尊研究そのものの基礎を固める成果であると認められよう。ここからさらに氏の論は叡尊を南都仏教における密教の伝統の中に位置づけようとする方向に展開することになった。

第二は、今述べた第一の具体化であるが、叡尊の三十代に始まる授戒活動と、六十代に始まる光明真言会の興行との関係が、不連続ではなく、思想的にはともに密教に基づく連続性のあるものとして捉えられたことである。ここに叡尊の宗教活動は、生涯にわたり一つの基本線を貫きつつ発展していたと理解されることになり、新たな叡尊像がきわめて鮮明に描かれることになった。

第三は、叡尊の思想と活動の重要な要素として文殊信仰・太子信仰・行基信仰の存在に注目し、それらの役割が分析されたことである。これら諸信仰は、はじめ戒律と密教を結合する媒介の役目を果たし、後には光明真言の導入の契機となり、さらに慈善救済事業の基になったと説かれる。思想の実相を立体的に把握し、宗教活動の実践化の要因を追究するためには、土着的なものも含めた様々の諸信仰との関係に注目することが有効かつ重要な観点であると思われるが、これら諸信仰に関する分析は本論文の大きな特色であり、一定の成功を収めている。

第四は、叡尊の宗教活動の内実が、誰をどのような方法によって救うのかという視角の分析によって、特徴づけられたことである。叡尊は上層の者には戒律を勧め、下層民には光明真言を勧め、非人には慈善救済事業を施す、という救済方法の使い分けをしたと氏は分析し、そこから叡尊の宗教活動の限界性に係わる諸問題を指摘する。一つはそのこと自体に差別が内包されるという問題であり、この点に叡尊と他の「新仏教」諸派との相違が見出されるとする。二つ目は教義上の矛盾である。叡尊の宗教活動は本来戒律と密教の融合を目指していたにもかかわらず、下層民を対象にしたときに戒と密の分離が生じることになった。これは真言律宗の教義が未完成に終わった理由であるとともに、叡尊の教団が同朋意識を欠いた理由もある、と氏は論じる。これらは叡尊に関する

重要な問題提起であると評価されよう。

以上のごとく、本論文は叡尊研究の分野において、数々の画期的な成果を生み出している。

次に、中世南都仏教に関する研究成果をみよう。その特色は道昌、真興、実範、叡尊、忍性と連なる僧侶の伝記研究を通して、南都仏教の特質を、少なくともその一面を照射しようとしたことにある。追塙氏が関心を向けたのは、南都仏教の本寺たる興福寺・東大寺そのものではなく、その下に存在する末寺・「別所」の群小寺院である。成果としては次の諸点が顕著であろう。

第一は、僧侶一人々々についてその関係した多くの群小寺院を摘出し、細かく検討を加えたことである。僧侶および寺院の個別実証研究として価値がある。

第二は、その結果として、群小寺院こそ密教の修行の場であるとともに、それぞれに修驗、阿弥陀信仰、観音信仰、諸々の菩薩信仰、白山等の神祇信仰など、雑多な諸信仰の場として機能していたことが明らかにされた。追塙氏は僧侶が実際に身を置くそのような「宗教的環境」を重視し、僧侶の宗教活動の生きた実態をそこに捉えようとする。その視点は魅力的である。

第三は、そのような群小寺院のネットワークに注目し、そこに南都仏教の活力の源泉を見出したことである。追塙氏が考察の対象とした僧侶はいずれも群小寺院に居を定め、密教に深く係わりをもったが、彼らから南都仏教の革新運動が胎動し、叡尊に至って結実するという見通しは、南都仏教における「新仏教」運動の特徴を的確に捉えた見解として認められよう。

かくのごとく南都仏教研究の分野においても、本論文は独自の視角から多くの確実な成果をあげることに成功している。

総じて本論文は、論旨も全体に首尾一貫して説得力を備え、史料も十分に博搜されている。叡尊および中世南都仏教の研究の進展に大きく貢献しており、平安・鎌倉仏教史の重要な業績として今後つねに顧みられることは間違いない。本審査委員会は以上の評価をふまえ、全員一致して追塙氏の研究業績は博士（文学）の学位を授与されるに値すると結論するものである。